

日本海に遊ぶ

京都大学水産実験所職員
上野 正博

イカの輸送

イカを収容した水槽を覗(のぞ)き弱ったイカを回収して測定するだけ。お駄賃は回収したイカ。そこでどうやってしめるかを尋ねるか水槽で飼つてもするのです。

イカを収容した水槽を比べればずいぶんと改良され、ほとんどの魚は活魚でも輸送されている料理屋さんには、毎日のように新しいイカと交換しているのです。

愛知県岡崎市にある自然科学研究機構の生物学研究所は、丹後半島の伊根に実験室を持っていました。でも、舞鶴は実験は無理なので、釣り上げたばかりのイカが生きたまま手に入る伊根に実験室を作ることになったのです。

実験所には実験室を作りたいたいの申し入れがありました。でも、舞鶴の市場に揚がるイカでは実験は無理なので、釣り上げたばかりのイカが生きたまま手に入る伊根に実験室を作ることになったのです。

時刻、「何匹でも持つて帰って下さい」と、N君がバケツ一杯のイカを持ってうれしそうに研究室にやってきました。「お前、輸送試験がうまくいってないのにそんな喜んで」というと、「先生もうれしうですよ。帰宅して、まな板に吸い付くイカを相手に悪戦苦闘。当然、イカはたらふく食べられそうです。」

ある日のこと。出勤

すると見慣れぬ活魚輸送トラックが、しかも、長崎ナンバーです。傍らにいた4回生のN君が「アオリイカつてど

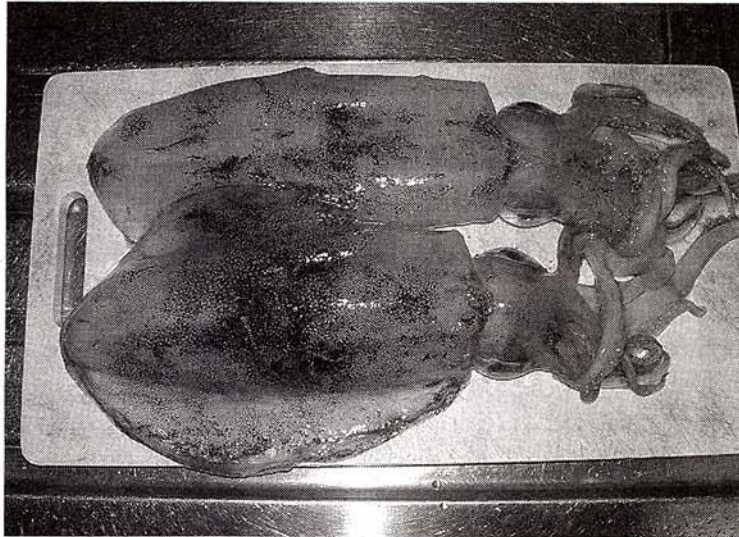
うやってしめるんですか」と尋ねてきました。「イカの類は弱いから水から揚げるとすぐ死んじゃうんで、わざわざしめることはしないけど。どないしたん」

聞けば、長崎からアオリイカを活(い)かりやヒラメなどの大物があうようよ。でも、悩みの種は京阪神や東京などの大消費地が遠くて価格の安いこと。昔

きた次第。どれどれと水槽を覗くと大きなアオリイカが数十匹。丹後で秋イカと呼ばれてるヤツよりも二回りも三回りも大きく、肉も厚そう。

ぐに死んでしまうので、いろんな魚がいる水族館でもイカはめつ

る伊根に実験室を作ることになったのです。



まな板からはみ出すアオリイカ

時刻、「何匹でも持つて帰って下さい」と、N君がバケツ一杯のイカを持ってうれしそうに研究室にやってきました。「お前、輸送試験がうまくいってないのにそんな喜んで」というと、「先生もうれしうですよ。帰宅して、まな板に吸い付くイカを相手に悪戦苦闘。当然、イカはたらふく食べられそうです。」